

夫から二三日もたちましてから、今度は一休が和尚さんのお供をして其武士の家へ参りました。すると、其門の前の橋側に一本の制札が立つて居て『このはし渡るべからず』

和尚さんは、これを見て

『どうしよう小僧、この橋を渡らねば、彼方へ行くことが出来ないが』

といつて困つて居ますと、一休は

『和尚さま、構ひませぬから、まんなかを通つて行きませう、』

さあ、私が先に立ちますから』

といつて、橋のまんなかを、大手を振つて通つて参りました。夫を見て、前のお武士が、中から飛

んで出て、

『こりや／＼小僧、あの制札が目に入らぬか、』

何故このはしを渡つたのだ』

と叱りますと、一休は

『はし渡るべからず』とあったから、この通りまんなかを渡つて参つた』

と答へましたので、さすがのお武士も舌を巻いてこの小僧は中々豪い、とても己などは叶はないといつて感心しました

(まだあり)

魚の感謝状

日本海の海の底で、くじらだの、ふかだの、さめだの、まぐろだのを、かしらにして、其他、いはしや、あじや、たこや、いかなどいふ大勢の魚たちが、より集つてお話をして居ます。

『やれ／＼、去年の二月から、大分人間の御馳走が、落ちてくるといふ話だつたが、大方は満洲に

近い海に居る仲間の處ばかりへ行つて、この邊へは、ちつとも、來なかつたのに、今年の五月末にはその埋め合はせの積りか、きたとはきたとは、四千何百人といふ人間の御馳走だ、おまけにどれもこれも、日本人と違つて、身體が大きいから食べる分量がよいあつて、ありがたいじやないか、これは、くじらがいつたのです。すると、ふかは『どうだい、ろすけの意氣地なしは、こんなに大勢で、はる／＼何千里といふ海を渡つて來て、こゝで吾々の御馳走になつて仕舞ふとは、ほんとにあきれるじやないか』

すると、さめは『然し、意氣地なしでも、なんでもいゝじやないか、吾々がこんな御馳走がたべられるのも、何かといや、ロスケの御蔭だぜ、ロスケでなくっちゃ

とてもこんなに御馳走してくれる氣遣はないもの』

といふと、たこが、のそ／＼出しやばつてきて『うん、それじや皆でロスケの萬歳をいはうか、』これを聞いて、まぐろは、ま／＼くろになつて、おこりだして

『なんだい、ロスケの萬歳なんて、ロスケを御馳走してくれたのは、誰だと思ふ、日本の東郷さんじやないか、だから、今から、皆で東郷さんの萬歳を三唱することしよう。』

大勢『賛成／＼』

そこで、くじらの發聲で、

東郷大將 萬歳！！

を三度唱へました。

すると、海の中で一番學者といはれて居る鯛が口

を出して

『近頃日本の國では、日本の海軍や陸軍の大將方に感謝狀を書いて送つて居る様に聞いて居る。さうさ、たこさんは、ロスケの萬歳を唱へようといつて、大にまぐろさんに叱られたが、私はロシヤの天子に捧呈しようと思つて、こんな感謝狀を認めて來たから、一度讀んで見ます、若しごさんせいなら、ザールに海底電線で申し上げましよう。』

日本の近くの海に住んで居る魚類一同こゝに謹しんで、露西亞のザールまで申し上げます。日本と露西亞と戦争が開けて以來、ザールの陸軍や海軍が、しきりと日本に負けたことは、日本からの海底電線で、のこらず承知しました。然るに今迄の海軍は、大低支那の近所で、戦争がわつた爲に、私共日本に近い海に住んで居る魚類

には、何のお蔭もなかつたですが、この間、五月二十七八日には、ザールの無勇なるボールチック艦隊は残らず、この近くの海で、日本艦隊の爲めにうち破られ、その爲に、私共は、ザールの無勇なる海軍士官や水兵を何千人となく御馳走に戴くことか出來たのは、偏へにザール陛下の御仁徳のお蔭と感謝します。日本海の魚類一同に代りまして、謹しんでお禮を申し上げます。

明治三十八年七月五日

日本海に住める魚類總代 くじら敬白

讀んで仕舞ふと、大勢一度に拍手して、

『賛成々々』

と言ひましたから、そこで、すぐこの感謝の意を海底電信で、露西亞皇帝に申し上げましたとさ。